

ジュリヤン・ソレルはなぜ撃ったのか

『赤と黒』についての一考察

杉本 圭子

はじめに

スタンダールの長編小説『赤と黒』（1830）が出版当時、文壇にもたらした衝撃は、今日ではほとんど忘れられている。ボードレールの『悪の華』やフロベールの『ボヴァリー夫人』のように、出版の是非をめぐる裁判にまでなった作品とはおのずと事情が異なるものの、野心家の青年が出世のために、その前途を邪魔しようとした愛人を教会で狙撃するという内容には、露骨な嫌悪感を示す評者も少なからずいた。主人公ジュリヤンの人格は冷酷そのもので、そこに描かれている社会は現実離れしており、小説全体の構成もまずければ、小説のタイトルも意味不明、という具合である。

当時から現代に至るまで、スタンダールの文体や作風に対する批判は尽きることがなく、一介の研究者としてはひたすら防戦を強いられるのだが、いっぽうで現在、『赤と黒』はリセでは定番の教材となり、バカロレアやアグレガシオンの課題としても取り上げられ、文学史の上では19世紀フランス小説の代表作として確固たる地位を築いている。いまや『赤と黒』の物語内容や人物像について異議をとなえる者はいない。小説の第2巻第19章に脱線のようにして挿入された、「小説とは往来に沿って持ち運ばれる鏡である」という一節がひとり歩きして、今日ではリアリズム小説のマニフェストのように見なされていることも、作品の権威づけに一役買っているのだろう。

作品の評価は、そのときどきの時代状況、読者による受容のありよう、文学研究・批評の潮流など、さまざまな要素に左右される。『赤と黒』出版当時のスタンダールは小説家としては駆け出しで、イタリア絵画や音楽に精通したディレッタント、そしてパリの知識人や芸術家が集うサロンで才気をふるう社交人として知られていた¹。折しもパリではシャルル10世の極端に反動的な政策に対抗して七月革命が勃発し、編集者の意向を受けてか「19世紀

¹ 処女小説『アルマンズ』（1826）のほか、美術評論『イタリア絵画史』（1817）、『恋愛論』（1822）、音楽評論『ロッシーニ伝』（1823）、旅行記『ローマ散歩』（1829）などを発表していた。

年代記」(Chronique du XIX^e siècle) および「1830 年年代記」(Chronique de 1830) という二つの副題をもつことになった『赤と黒』は²、必然的に同時代のフランス社会の現実を描き出した小説として受け取られた³。だからこそ、自己保身ばかりを考えてときに自由主義者を気どる地方貴族や、それを出し抜こうと画策するブルジョワ、ひそかに体制の転覆をもくろむ王党派の貴族や聖職者たちのありようと、その中で自らの才能と「偽善」だけをたのんで孤独な戦いを強いられる野心家の青年の物語は、陰々滅々たる印象を与えた。現代に生きるわれわれが、そうした人物像や社会の描写に、実際どれほど「真実らしさ」が欠けて見えただのかという客観的な判断を下すのは難しい。いっぽうで歴史研究の進展によりわかってきたこともある。たとえば史実に照らしたとき、「コングレガシオン」(congrégation) と呼ばれるイエズス会系の秘密結社が、ヴェリエールのような地方の小さな町の勢力地図にまで隠然たる影響力を及ぼしているという設定にかなりの誇張があることは、すでに指摘されている⁴。

² この経緯についてはプレイヤッド版『小説集』第一巻のイヴ・アンセルの「解題」を参照のこと。以下、『赤と黒』のテキストについてはこの版から引用し(略号 RN)、巻数・章・ページのみを示す。Stendhal, *Le Rouge et le Noir dans Œuvres romanesques complètes*, t. I, éd. établie par Yves Ansel, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 2005, « Notice », p. 964-966。1830 年に二巻本で出版された初版では、各巻の表紙のタイトルの下に「19 世紀年代記」、各巻第 1 章の見出しの前に「1830 年年代記」の副題が付されている。

³ 『赤と黒』の執筆の経緯については正確なところはわかっていないが、着想を得たのは 1829 年 10 月下旬のマルセイユ滞在中で、パリ帰還後も執筆が続いたと考えられている。1830 年 4 月の、出版社との契約時にはほぼ上巻の執筆が終わっており、七月革命の「栄光の三日間」(7 月 27 日から 29 日)の後も加筆が続けられ、11 月末に出版された。本文には七月革命時の出来事についての具体的な記述はないが、「1830 年のフランス人」(RN, p. 688 (II, 23)) のような年度そのものを含む表現や、アベ・プレヴォー原作のバレエ『マノン・レスコー』の上演(1830 年 5 月 3 日初演)など、時事的な言及もあり、執筆は七月革命期まで及んでいたと推察される。初版では表紙と第 1 章の間に「編集者の序言」なるものが挿入されていて、「原稿は 1827 年に書かれたと考える根拠」があり、七月革命前に出版の準備ができていた、とある。だが、こうした用心深さも(この序言も作者自身によって書かれた可能性が高い)、ページをめくればすぐさま「1830 年年代記」という副題(注 2 を参照)によって打ち消されてしまうことを、ガルニエ版の注釈者ピエール＝ジョルジュ・カステックスが指摘している (*Le Rouge et le Noir*, éd. établie par Pierre-Georges Castex, Bordas, coll. « Classiques Garnier », 1989 (初版 1973), p. 513, n. 1)。

⁴ たとえば以下の文献を参照のこと。Philippe Berthier, « Mangeons du jésuite ! Mangeons du jésuite ! », dans *Stendhal : Littérature, politique et religion mêlées*, « Classiques Garnier », 2011, p. 163-178。イエズス会暗躍説が広まったのは、ユルトラと呼ばれる過激王党派の一派のアンチ・キャンペーンによるところが大きく、むしろ王政復古下のフランス国民の宗教熱は冷めていた。スタンダールの過剰な演出は当時の状況を受けてと

「往來に沿って持ち運ばれる鏡」はすべてを一様に映し出すわけではなく、その鏡を差し向ける者（作者）がいるのであり、鏡を動かす速度、鏡を差し出す位置や角度や順序によって、読者にいかような印象も与えられる。こうしたことは、映画の技法、およびそこから示唆をえたナラトロジー（物語論）の「視点」の概念を通じて、容易に理解されるようになった⁵。エーリッヒ・アウエルバッハが、歴史的、政治的、社会的状況を、登場人物たちの行動や物語の展開の中に有機的に織りこむ「ミメシス」の作家として、スタンダールを近代的リアリズムの作家のひとりに数えてから⁶、スタンダール研究者たちが具体的な歴史的考証作業を通じ、作品の背景やモデルとなった人物像を明らかにしていった時代を経て、今や私たちは、スタンダールの提示する「鏡」が必ずしも公平で公正な鏡ではなく、しばしば現実を「歪める」（*déformant*⁷）鏡になりうるという認識のもとにテキストと向き合う時代を迎えている。そこであらためて今までの研究成果や受容をふまえ、『赤と黒』が読者に与えてきた違和感の正体を検証してみたい。疑義や批判はタイトルの奇妙さ、登場人物たちの性格や行動、物語展開の唐突さや不自然さ、テキストの各所に散りばめられた政治風刺や宗教批判、文体など、さまざまな面に向けられている⁸。いずれの要素も個々に切り離して論じることはできないが、本論文で注目したいのは、とりわけ小説の結末に関する議論である。

-
- いうよりも、スタンダールが幼年時代に受けた、ライアンヌというイエズス会士による厳格で抑圧的な教育の記憶によるものであると、ベルティエは結論づけている。
- ⁵ この分野の嚆矢はジャン・プレヴォーの『スタンダールの創造』（Jean Prévost, *La Création chez Stendhal*, Le Mercure de France, 1951 ; Troisième partie, « *Le Rouge et le Noir* », VII-VIII）、およびジョルジュ・ブランの『スタンダールと小説の問題』（Georges Blin, *Stendhal et les problèmes du roman*, José Corti, 1953）である。後者ではスタンダールのリアリズムを「主観的リアリズム」と特徴づけ、第1章が「鏡の美学」、第2章が「視野の制限」、第3章が「内的独白」の分析にあてられている。視点と語りの審級に関する考察は、ジェラルド・ジュネットの『フィギュール III』（1972）の物語論に引き継がれる。
- ⁶ エーリッヒ・アウエルバッハ『ミメシス —— ヨーロッパ文学における現実描写』（1946）篠田一士・川村二郎訳、ちくま学芸文庫、下巻、1994年。
- ⁷ イヴ・アンセルの表現。RN, « Notice », p. 975. プルジョワ階級に生まれたスタンダールは、政治的には自由主義的な考えをもっていたが、生涯にわたって上流階級への憧れを抱き続け、小説の中でもサロンや劇場、舞踏会、貴族の邸宅などを中心に描いた。上流家庭の使用人を除けば、農民や職人などのいわゆる庶民階級はほぼ描かれていない。こうしたスタンダールの鏡の「死角」については、アンセルの次の研究書に詳しい。Yves Ansel, *Stendhal littéral : Le Rouge et le Noir*, Kimé, 2001, p. 175-191.
- ⁸ 『赤と黒』出版当時から19世紀末に至るまでの書評については、次の3つのアンソロジーを合わせて見る必要がある。Michel Crouzet et al., *Stendhal*, coll. « Mémoire de la critique », Presses de l'Université de Paris-Sorbonne, 1996 ; *Stendhal sous l'œil de la presse*

マティルドとの結婚話を台無しにされたジュリヤンは急遽ヴェリエールに舞い戻り、父ラ・モール公爵あてにジュリヤンを中傷する手紙を書いたレナール夫人を、教会のミサの最中に狙撃する。後述するように、出版当時、ジュリヤンの非人間性や冷酷さや、物語の展開の唐突さを非難する論調は多くあったが、この結末自体を問題視する評者はあまりいなかった。ところが、スタンダールが心理小説の作家として評価されるようになった 19 世紀末ごろからにわかに、この手紙の発覚から狙撃、逮捕に至る一連の経緯に不自然さがあるとの指摘が、批評家たちから相次ぐようになった。それに対して研究者がさまざまなやり方で反論、弁護を試みる。ある意味、今でも続いているといつてよいこの一連の論争の流れをたどりつつ、21 世紀の日本に住むひとりの読者として、あらためてテキストに立ち戻り、検証してみたい。

出版当時の反響

『赤と黒』は二部構成で、第一巻がフランシュ・コンテ地方の架空の小都市ヴェリエールとブザンソン、第二巻は主にパリで展開される。ジュラ地方の材木商の息子ジュリヤンは、家業よりも読書を好むきゃしゃな青年で、家族にうとまれている。町の司祭にラテン語を習い、この境遇を脱するためには聖職を志すよりないと決めていたが、請われてヴェリエールの町長レナール氏の三人の息子の家庭教師をつとめることになる。若い家庭教師に対する母親のレナール夫人の同情と尊敬はやがて愛情に変わり、ジュリヤンも上流階級への復讐のため、恋愛経験のなさを押し隠して必死で夫人を誘惑する。ともに時間を過ごすうちに、ジュリヤンは真に夫人を愛するようになるが、レナール氏への敵意ゆえに、それをはっきりと意識することはない。やがて

contemporaine (1817-1843), textes réunis et publiés par Victor Del Litto, Champion, 2001 (以下、*SOPC* と略す) ; Xavier Bourdenet, José-Luis Diaz, « *Le Rouge et le Noir* devant la critique (1830-1894) », <https://serd.hypotheses.org/files/2017/02/RNCritique.pdf> (sur le site de la SERD). 『赤と黒』各種校訂版の付録にも書評の一部が収められている。こうした書評の分析を含めた『赤と黒』受容史については複数の論考があるが、ここでは次の 4 点を挙げておく。Pierre-Georges Castex, « L'accueil des contemporains au roman », *Le Rouge et le Noir*, éd. citée, p. 688-692 ; Michel Crouzet, « Préface », dans Michel Crouzet et al., *Stendhal*, coll. « Mémoire de la critique », *op.cit.*, p. 3-54 ; Philippe Berthier, *Stendhal en miroir : Histoire du stendhalisme en France (1842-2004)*, Honoré Champion, 2007 ; Xavier Bourdenet, « *Le Rouge et le Noir* en 1830 : "Billet gagnant", roman monstre » dans *Lectures de Stendhal, Le Rouge et le Noir*, Rennes, Presses universitaires de Rennes, 2013, p. 11-35.

二人の関係は夫の知るところとなり、ジュリヤンはブザンソンの神学校に送られる。神学校では謹厳なジャンセニストのピラル校長に目をかけられるが、その性格と才能ゆえに同級生たちからは妬まれ、疎んじられる。折しもピラル師が校長の職を辞してパリに向かうことになり、ジュリヤンは師の紹介で大貴族、ラ・モール侯爵の秘書となる。そこにはパリ中の青年貴族の憧れの的であるラ・モール嬢マティルドがいた。

マティルドは月並みで退屈な青年貴族たちには満足せず、愛人を死刑にされた祖先のマルグリット・ド・ヴァロワにならい、非凡な才能をもった反逆児こそ自分の相手としてふさわしいと考えた。そこで、平民の身分でありながら家柄や爵位を軽蔑し、底知れぬエネルギーを持ったジュリヤンに目をつけ、誘いかけた。これを畏だと警戒したジュリヤンはしばらくの間は慎重な態度を崩さなかったが、駆け引きの末、相手に熱烈な恋心を起させるに至る。マティルドは妊娠し、それを知った侯爵は怒り狂うが、娘の体面を保つためにジュリヤンにラングドックの領地と軽騎兵中尉の身分を与える。すべてを手に入れたジュリヤンが野心に酔っていたそのとき、ジュリヤンの人格を誹謗するレナール夫人の手紙がラ・モール氏のもとに舞い込み、マティルドとの結婚は白紙となる。衝動にかられたジュリヤンは馬車に飛び乗ってヴェリエールへと向かい、教会のミサの最中にレナール夫人を狙撃する。夫人は一命をとりとめ、獄中でそれを知ったジュリヤンは心から後悔し、自分が本当に愛したのはレナール夫人だけだったことを悟る。裁判の中で、下層階級の青年が社会の上層にのしあがろうとするのを阻止するブルジョワの激しい敵意を告発したジュリヤンは、陪審員の反感を買い、死刑判決を受ける。面会にやってきたレナール夫人と愛情を確認しあったのち、彼はマティルドの奔走をよそに、控訴も、特赦請願も拒否し、夫人への愛に生きるようになる。処刑台に向かうジュリヤンの脳裏には、かつてヴェルジーの森で夫人と過ごした甘美な瞬間の思い出が浮かんでいた。以上が小説の梗概である。

出版当時の書評を眺めると、まずは小説の不可解なタイトル、ついで小説内の痛烈な時代風刺や陰鬱な社会絵図を非難するものが多く⁹、さらにジュリヤンとマティルドの人物像に対する批判、二人の恋愛の非道徳性、非現実性、小説の構成の不備に対する批判が続く。野心ゆえにかつての恋人を教会で狙

⁹ たとえば以下のような批評がある。「私はスタンダール氏の本の中ほどに激しいイエズス会への怒り、ブルジョワへの怒りをほかで見たことがない。彼の筆にかかると、あらゆるものが決定的にしおれてしまう。美しい日の光も、風光明媚な地も、至福の感情も。」（1830年12月26日付『ジュルナル・デ・デバ』誌、SOPC, p. 594）。

撃するジュリヤンは、実際にはありえない人物像——「怪物」、「おぞましい性格」、「エゴイスト」——などと評され¹⁰、中には小説家・批評家のジュール・ジャンンのように、「私はジュリヤンが大嫌いだ¹¹」と嫌悪感をあらわにする評者もいた¹²。先祖のマルゴ王妃の幻影にとりつかれ、あえて敵であるはずの平民階級の男に狙いを定め、その男に恋していると思いきもうとする侯爵令嬢マティルドも、現実の社交界ではありえない、奇妙で自然さを欠く性格の持ち主として批判されている¹³。

物語展開についてはどうだろうか。

読者はたえず作者に議論をふっかけてたくなる。ここでは感情の不自然さ、状況のわざとらしさ、あるいは不可解さゆえに。別の箇所では出来事や性格の展開の粗さゆえに¹⁴。

« *imprévu* » (意外性) と « *paradoxe* » (予想とくいちがう展開)。この二つの語が書評に頻出するところを見ると、当時の読者の中にはこうした特異な性格の登場人物が織りなすドラマを、自然な流れに沿ったものとして受け止められない者も少なからずいたということになる。後述するように、『ルヴュ・ド・パリ』の評者の言う「展開の粗さ」はとりわけ、第二部でジュリヤンがブザンソンに舞い戻り、狙撃を実行するまでの場面に顕著であるとされ、だ

¹⁰ 「ジュリヤンの性格には矛盾や真実らしからぬ点がある」(1830年11月28日付『グロヴ』誌、*ibid.*, p. 579)、 「[ジュリヤンとマティルドの性格は] 理解されないだろう」(1830年12月20日付『フィガロ』誌、*ibid.*, p. 586)、ジュリヤンという「野心家のおぞましい (*odieux*) 性格」(同誌、*ibid.*, p. 588)、「ジョフロワ=サンティエールの意味での精神的怪物 (*monstre moral*)」(1831年1月14日付『コレスボンダン』誌、*ibid.*, p. 610)、など。

¹¹ 『ジュルナル・デ・デバ』誌前掲記事、*ibid.*, p. 595。

¹² いっぽうレナール夫人、およびジュリヤンとレナール夫人との恋愛については、批評家たちは概して好意的な評価を下している。そのためか、第二巻よりも第一巻のほうの評価が高い。『ガゼット・リテレール』誌1830年12月2日の書評では、ふたりの恋愛はルソーとヴァランス夫人の関係になぞらえられ、このうねなく自然に、巧みに描かれている、と賞賛されている (*Ibid.*, p. 583, p. 585)。

¹³ 1831年2月『ラルティスト』誌、*SOPC*, p. 614。ジュール・ジャンンに至っては「正気ではない (*folle*) 」という表現まで使っている (*Ibid.*, p. 598)。

¹⁴ 1830年第30巻『ルヴュ・ド・パリ』誌、*ibid.*, p. 602。ほかに、文体や人物の性格、物語の筋などにこれほどむらがあり、先の予想のつかない本はないという評価や (『ガゼット・リテレール』誌前掲記事、*ibid.*, p. 580)、読者が興に乗ってきたところで話をいったん中断し、その後予想もつかない結末に導くのが、この作家の常套手段だというような指摘がある (『ジュルナル・デ・デバ』誌前掲記事、*ibid.*, p. 599-600)。

LE ROUGE ET LE NOIR

CHRONIQUE DU XIX^e SIÈCLE,

PAR M. DE STENDHAL.

TOME SECOND.



PARIS.

LEVASSEUR, LIBRAIRE, PALAIS-ROYAL.

1851.

『赤と黒』初版第二巻口絵

とすればジュリヤンの狙撃を唐突な行為として問題視する向きがあっても不思議はない。

各誌とも新作の紹介ということで、『赤と黒』のあらすじや抜粋を載せている。『ガゼット・リテレル』誌は物語の概要を正確に紹介したうえで、第一部のレナル夫人との恋愛のくだりを褒め¹⁵、ジュリヤンの物語はぜひともマティルドとの結婚の時点で止めておくべきだった、ただしそれだと月並みなラストになってしまったかもしれないと指摘する。すなわち、ジュリヤンが最後に牢獄で幸福な思い出にひたるシーンのあとには「血なまぐさい結末」が控え、さらに「グレーヴ広場の愛好者」にはたまらないくだりが続くからだ¹⁶。前者はジュリヤンの処刑を、後者はマティルドがジュリヤンの首をもらいうけて接吻する場面を指すと考えられる。結末に向かう一連の流れを否定はしないが、作品の醍醐味はむしろ第一部にあるという立場である。

王党派の『ガゼット・ド・フランス』は、終始手厳しい。評者は「この破廉恥な文学の時代にいっそう響きを買うような」作品が出版され、しかも一部で好評を博していることに立腹し、その「破廉恥さ」の一例として、第二巻の口絵がいかにも読者の好奇心を刺激するような性質のものであることを挙げる（図版参照）。これは大理石のテーブルに安置されたジュリヤンの首に接吻しようとするマティルドの、いわば本懐を遂げた姿を描いたものだが、この図版について、評者はジュリヤンを貶める趣旨の説明を加えている。すなわち、打ち落とされたこの首は、女たちや恩人の娘たちを次々と誘惑し、「単に愛情のしるしを示しすぎただけのひとりの不幸な女」をあやめた「イエズス会士」のものであり、この男は自らの「英雄的行為」（夫人狙撃のこと）を誇示するために「神の神殿」を選び、さらに司祭が信徒に「贖罪の生け贄」を示すその瞬間を選んだ、云々¹⁷。ジュリヤンは「イエズス会士」ではないし、全体として悪意に満ち満ちた解釈であることは明らかだが、レナル夫人のことを指しているとおぼしき「単に愛情のしるしを示しすぎただけのひとりの不幸な女」という表現には、不思議と真実の響きがあるように思われる。

¹⁵ 前注 12 を参照。

¹⁶ *SOPC*, p. 584.

¹⁷ *Ibid.*, p. 612. 司祭が信徒に「贖罪の生け贄」を示すその瞬間、とは「聖体奉挙」の儀式を指す。『ガゼット・ド・フランス』は穏健王党派の新聞で、王政復古下では政府の御用新聞ようになっていた。

こうした道徳的な非難に比べると、『ルヴュ・アンシクロペディック』誌の評者はかなり鷹揚である。一部で「実際にはありえない」として批判を浴びたジュリヤンの人物像——下層階級に生まれ、まずまずの教育を受け、世の無理解と理不尽に立ち向かうためには聖職につくよりない、と意を決めこむ青年——には深い共感を示したうえで、レナール夫人狙撃そのものは非難している。「あるとき、これほどの才知の持ち主に似つかわしくない情念の発作が、恐ろしい復讐へと彼〔ジュリヤン〕を駆り立てる。これは明らかに何の効力もないだけにいっそう、非難すべき行為である¹⁸。」評者が、ジュリヤンを犯罪に駆り立てた動機を「復讐」(vengeance)と見なしている点に注目しよう。そのうえで評者は、昨今よく文学の題材として取り上げられる死罪をめぐるおぞましい細部(断頭台、処刑台…)が、本作においては省略されている点を評価し、「よい趣味」だとほめている。

この最後の点に関連して、「この話の結末をおかしい(absurde)と思う読者もいるだろう」と指摘するのはジュール・ジャンンである¹⁹。「断頭台、死刑執行人、とどめの一撃、陪審員といった、精神的・肉体的拷問の集合体」を扱うには、かなりの「節度」(modération)をもって臨むことが必要なのに、この小説ではあまりにも性急にジュリヤンの処刑が行われてしまうというのだ。「とりわけ死刑執行人は、どうしてこの人物を手にかけることになったのかがわからない場合、急いでけりをつけようとする」のが常だから、と皮肉っぽい。いっぽう、ジュリヤンの犯行の動機については、それに先立つ小説のあらすじ紹介の中で、レナール夫人の手紙に「怒り狂った」(furieux)ジュリヤンがヴェリエールに舞い戻り、ミサの最中にレナール夫人を撃った、とある²⁰。すなわち前述の『ルヴュ・アンシクロペディック』誌の評者と同様、夫人への復讐を犯行の動機ととらえているわけである。ジャンンが問題視するのは、狙撃の犯行の動機の薄弱さではなく、犯行から裁判を経て処刑に至るまでの経緯が、(ジャンンによれば)じゅうぶんな説得力をもって展開されていないことなのである。

¹⁸ 1831年2月第49巻『ルヴュ・アンシクロペディック』誌、*ibid.*, p. 621.

¹⁹ *Ibid.*, p. 598.

²⁰ *Ibid.* この点については後述する。

「復讐」か「嫉妬」か

こうして見てくると、当時の書評を見るかぎりでは、意表をつく物語展開に異議をとなえる論者でも、ジュリヤンの狙撃に至るまでのプロセスそのものを問題視しているわけではないことがわかる。私個人について言えば、初めて『赤と黒』を翻訳で読んだ高校生のときから、ジュリヤンがなぜ夫人を撃ったかを疑問に思ったことはなく、自然な感情の流れに沿った展開だと思っていた。たまたま周囲で「なんで撃ったんだろう」という感想をもらす人がいると、むしろそちらのほうを不思議に思ったものだ。

というのは、『赤と黒』の本文中には、数度にわたってジュリヤンの狙撃の意図ととれるものが記されているからである。犯行直後に収監されたヴェリエールの牢獄で、ジュリヤンは判事にむかって「計画的殺人」を犯したと告げ、マティルドに対しては「復讐しました」と書き送っている²¹。死刑を意識して心の平静が保てないときには、「どうして後悔することがあろう。俺は手ひどい侮辱を受けたのだ。だから殺した²²」と自分に言い聞かせる。それに応ずるように、農家の娘に扮して牢獄を訪れたマティルドはジュリヤンの腕に飛びこみ、「あなたの言う罪というのは、りっぱな復讐のことじゃないの。この胸に高鳴っている心の気高さを、存分に伝えてくれたんだわ」と告げる²³。

だがいっぽうで、狙撃によって出世の道が断たれた瞬間から、野心も、マティルドに対する愛情も、急激に薄れていく。後悔の念は、レナール夫人の傷が致命傷でなかったとわかってから、かえって増幅される。死刑判決を受けたあと、地下牢でまず考えたのも、処刑前にレナール夫人と会えたら何を伝えようかということだった。「あんなことをしたあとで、あのひとだけを愛していると、どうやって説得できるだろうか。というのも俺は結局、野心のため、あるいはマティルドへの愛ゆえに、あのひとを殺そうとしたのだから²⁴」。今や彼は犯行時の自分の心理状態を、はっきりと客観視できている。

自分を深く愛してくれていると思っていた女性の裏切りを、ジュリヤンの自尊心は許すことができなかった。だから復讐した。そう考えれば、至ってシンプルな、多分に通俗的な物語展開であり、その意味で、小説の副題に象

²¹ RN, p. 755-766 (II, 36).

²² *Ibid.*, p. 757 (II, 36). この時点ではまだ、ジュリヤンは夫人が生きのびたことを知らない。

²³ *Ibid.*, p. 764 (II, 38).

²⁴ *Ibid.*, p. 784 (II, 42).

徴される「年代記」的な企図—— 同時代の政治的・社会的状況を活写する—— が、小説の末尾に至って急激に縮み、「ロマネスク」な筋立てに取ってかわられている、というマリ＝パルマンティエの指摘は的を射ている²⁵。野心を捨て、過去の愛の幸福な記憶とともに生きる獄中のジュリヤンの姿は、以前とはうってかわって別人のようである。

ここで大きな価値転換が起こったのはたしかだ。だが変わらないものもある。小説の末尾で告解師が訪ねてきて、特赦を得るためには、世間にむかって悔い改めたところを大々的にアピールよりないと勧めたとき、ジュリヤンはこう答える。「ですが、自分自身を軽蔑するようになったら、私に何が残りますか。私は野心家でした。そのことで自分を責めようとは思いません。そのときは、世の習いにしたがって行動していたまでです。今の私は、その日その日を生きています²⁶」。処刑の瞬間に至るまでジュリヤンを支えていたもの、それは自尊心である。自分に対しても、他人に対しても、恥じるどころなく生きることを、彼は自分に課してきたのである。

このように自意識の強い主人公が犯した唯一の失態が、レナール夫人に対する狙撃だった。これを深い信念に基づいた行動と見るか、あるいはいつときの発作的な行為と見るか。われわれは先に、ジュリヤンの意識の中ではこれは夫人の側からの「手ひどい侮辱」に対する「復讐」ととらえられており、マティルドとの間でもそのように了解されていたことを確認した。自尊心の高いジュリヤンにとって、もっとも耐えがたいもののひとつが「侮辱」なのだ。秘書としてのジュリヤンをそばで見えてきたラ・モール侯爵の証言もある。

「あの男に家柄を尊ぶ気持ちががないのは確かだ。われわれを本能的に敬っているわけではない……困ったものだ。[ほかの神学生とは]大違いで、軽蔑されることには耐えられないのだ²⁷」。ところが、このような誇り高い感情に根ざすはずの動機が、小説中では必ずしも周囲の人間に理解されていない。

たとえば第2巻第40章で、担当弁護士がジュリヤンに、犯行は「嫉妬によるもの」だと陳述してもらおうと弁護がしやすいのだが、と持ちかける場面がある²⁸。ここで弁護士は「一般の人々と同じように」犯行の動機を嫉妬だと考えていた。当然のことながら、ジュリヤンは激怒する。また、先に触れた告

²⁵ Marie Parmentier, « Présentation » dans Stendhal, *Le Rouge et le Noir*, Présentation, notes, dossier, chronologie, bibliographie par Marie Parmentier, Flammarion, coll. « GF Flammarion », 2013, p. 17-18.

²⁶ *RN*, p. 803 (II, 45).

²⁷ *Ibid.*, p. 747 (II, 34).

²⁸ *Ibid.*, p. 774-775 (II, 40).

解師も、「あなたの犯行の動機自体の説明がまだついていない²⁹」以上、世間にむかって改悛の情をアピールする余地はまだある、と説得する。嫉妬が目的の犯行である、というメロドラマ的な解釈がここまで広く世間に流通しているというのは、いささか極端な状況であり、物語展開のうえでは唐突な印象を与えないだろうか。実はジュリヤンより先にマティルドが、裁判をジュリヤンに有利に運ぶための裏工作を頼みにブザンソンの副司教、フリレール師のもとを訪ねたとき、そうした噂について聞かされていた。司教職へのとりなしをちらつかせるマティルドの氣勢をそぐため、フリレール師はジュリヤンがレナール夫人と相思相愛の仲であり、ジュリヤンは最近夫人の告解師となったディジョンの若い神父に嫉妬して犯行に及んだ、そしてわざわざ銃撃の場所を教会に定めたのも、その恋敵がまさにミサをしている最中だったからだ、という「いかにももっともらしく見える推論」を話して聞かせる³⁰。ジュリヤンと夫人との過去のいきさつを初めて知ったマティルドは激しく動揺する。

マティルドは高慢な性質ながら、社交界では人の心を忠実に描き出す能力とされている、冷めた用心深さをたつぷりと持ち合わせていたので、情熱的な魂においては強烈な欲求にまで高まることのある幸福、すなわちあらゆる用心を軽んじるという幸福を、理解できなかった³¹。

ジュリヤンとマティルドという二人の人物を分かつ決定的な一線を、この一節ははっきりと示している。スタンダール流の「幸福の学」の観点から見れば、体面や身の安泰を慮る用心深さ（*prudence*）は、究極的な幸福から人間を遠ざける。それを踏みこじってこそ、人生は価値あるものになるのであり、そこに踏み出せるかどうか、「幸福なる少数者³²」（*« the happy few »*）を選別する基準となる。

ただしジュリヤンは夫人を狙撃する時点までは、こうした「冷めた用心深さ」を重んじる人間でもあった。貴族や聖職者たちに対しては、彼らの宿敵であるナポレオンへの崇拜をひた隠しにしていたし、マティルドから最初に逢引の誘いを受けたときには、誘いを畏だと思ひこみ、手紙の写しをとった

²⁹ *Ibid.*, p. 802 (II, 45).

³⁰ *Ibid.*, p. 768-769 (II, 38).

³¹ *Ibid.*, p. 769 (II, 38).

³² 小説の末尾に掲げられた献辞。『赤と黒』初版では第一巻と第二巻の巻末の目次の直後に置かれている。

うえで、オリジナルを聖書の表紙の中に隠して友人のもとに預けるほどの用心深さであった。その冷静なジュリヤンが、レナール夫人の告発の手紙を受けとったとたんには激情に我を忘れたようになるのはおかしいのではないか、という疑問が、世紀後半に活動した批評家のエミール・ファゲの指摘を皮切りに起こってくる³³。

ジュリヤン「錯乱」説とその後

ファゲの主張によれば、小説の末尾で「すべての登場人物が我を失い」、その中でも、ゆるぎない意志と冷静さを誇るジュリヤンが「もっとも分別を失っている³⁴」（« le plus insensé de tous »）。なぜならマティルドの妊娠発覚以前、父ラ・モール侯爵があればほどジュリヤンに信頼をおいていたことを考えれば、もと愛人の告発状があったところで、やがてその怒りもおさまり、愛しい娘の将来のため、政治力にもものを言わせて婿の失態を取り繕うくらいことは、十分に期待できたはずだからである。ジュリヤンはヴェリエールに直行する前に、「単に待てばよかったのだ³⁵」。終始強気なマティルドが茫然自失の態で「すべておしまいだわ！」（« Tout est perdu. »）と連呼するのも³⁶、レナール夫人が以前、匿名の手紙によって夫に不倫がばれそうになったとき、あれほどうまく機転をきかせてふるまったのに、今回、信心だけのためにかつての愛人の告発に及ぶのも、みな常軌を逸している、というのがファゲの主張である。

ファゲは続けて、スタンダールがこうした不自然な結末を用意した原因として、1830年という時代情勢が作者のエネルギー礼賛の傾向に拍車をかけ、

³³ Emile Faguet, *Politiques et moraliste du XIX^e siècle : Stendhal, Tocqueville, Proudhon, Sainte-Beuve, H. Taine, E. Renan, Lecène et Oudin*, 3 vol., 1891-1900. スタンダール論（第3巻所収）の初出は1892年2月1日付の『両世界評論』である。このファゲの評論は、注8で挙げた3つのアンソロジーからは洩れているが、イヴ・アンセルも指摘するように、知られているうちでは、ジュリヤンの一時的錯乱を指摘した最初の評論である（Yves Ansel, *op. cit.*, p. 126-127.）。ジュリヤンを「不道徳な人間」（« l'âme dépravée », p. 48）と評するいっぽう、社会の大変動によって一時的に将来の道を開かれたものの、あらゆる障害と闘うことを運命づけられた時代および階級の典型例でもあるとして、社会学的分析の片鱗も見せている（*Ibid.*）。フィリップ・ベルティエも、矛盾と明晰さを併せ持つこの評論の重要性を指摘している（Philippe Berthier, *Stendhal en miroir, op. cit.*, p. 150-153.）。

³⁴ Emile Faguet, *op. cit.*, t.3 (1900), p. 51.

³⁵ *Ibid.*, p. 52.

³⁶ *RN*, p. 752 (II, 35).

貴族と平民の結婚、および主人公の出世という「ブルジョワ的な結末³⁷」に飽き足らなくさせた可能性を挙げている。この推論はいささか予定調和的な響きを持っているが、次の一節はその印象をさらに強くする。「ジュリヤンをラファルグたらしめるために、スタンダールは小説全体を覆し、台無しにしてしまった。小説の流れを完全に一変させてしまったのである³⁸」。

ここで言う「ラファルグ事件」は後述する「ベルテ事件」とならび、『赤と黒』の着想の源となった事件のひとつで、1829年1月にピレネー山中の小さな町で家具職人の青年アドリヤン・ラファルグが、嫉妬から愛人を惨殺し、5年の刑に処された事件である。スタンダールは当初からこの事件に強い関心を示し、前年の著書『ローマ散歩』の中で裁判記録を長々と引用している。そして、貧しい階級出身であるにもかかわらず高い教育を受けたラファルグを「財産をもたないために働かざるをえず、生活上の必要と闘っている」小市民階級の若者の典型例と見なし、パリの上流階級の青年たちが失ってしまった「強烈に、恒常的に感じる力³⁹」やエネルギーを保持している、と評価する。「おそらく今後、偉大な人間はことごとく、ラファルグ氏の属している階級から出るだろう⁴⁰」。ジュリヤン像を予告したとも言われる一節である。

このように、狙撃に向かうジュリヤンの性急さ、展開の唐突さを、モデルとの整合性という観点に回収しようとする議論は、その後20世紀半ばすぎまで散発的に現れる。研究者のあいだでラファルグ事件およびベルテ事件に関する実証的な研究⁴¹が進むにつれて、実際の事件と小説の共通点が知られるようになったことも関係しているにちがいない⁴²。それに伴い、スタンダールが現実の事件に引きずられたと思われる点なども指摘されるようになった。たとえば、小市民階級出身の神学生アントワーヌ・ベルテが、かつて住みこみで家庭教師をしていたミシュー家の夫人を狙撃した事件で、被告自身が裁

³⁷ Emile Faguet, *op.cit.*, p. 53.

³⁸ *Ibid.*.

³⁹ Stendhal, *Les Promenades dans Rome dans Voyages en Italie*, éd. établie par Victor Del Litto, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1973, p. 1079.

⁴⁰ *Ibid.*.

⁴¹ 代表的な書物を挙げれば、ラファルグ事件との関連については Claude Liprandi, *Au Cœur du Rouge : l'affaire Lafargue et Le Rouge et le Noir*, Lausanne, Editions du Grand Chêne, 1961。およびベルテ事件については René Fonvieille, *Le véritable Julien Sorel*, Paris et Grenoble, Arthaud, 1971 など。

⁴² スタンダールが参照した裁判の記録、および事件と小説の共通点、相違点については、クラシック・ガルニエ版のカステックスの序文に詳しい。Pierre-Georges Castex, « Introduction », *Le Rouge et le Noir*, éd. cit., p. LIII-LXV.

判の当初から動機として挙げていたのが「恋心と嫉妬⁴³」なのだが、先に触れたように、これは世間でジュリヤンの犯行の動機が「嫉妬」と信じられていた、という状況設定と重なる。ミシュー夫人と恋仲になったために屋敷を追い出されたベルテは、次に向かった神学校からも、二軒目のコルドン家からも追い払われ、それをミシュー夫妻の妨害のせいだと思ひ込み、逆恨みしていた。そして夫人が自分との約束を破り、新たに子どもたちの家庭教師として迎えた青年を後釜に据えたと聞くに及び、「復讐」した…。いっぽう『赤と黒』で、ジュリヤンの「恋敵」が本当にいたとするなら、改心したレナール夫人を意のままに操って例の告発の手紙を書かせた告解師の若い神父以外にはないのだが、実際にはジュリヤンは獄中で夫人自身の口からこの神父のことを聞かされるまで、その存在を知らないはずなのだ⁴⁴。嫉妬のしようもないのだから、犯行の動機になるわけもない。それなのに弁護士が裁判の手続きを単純化するために、動機は嫉妬だったことにしないかとジュリヤンに持ちかけるくぐりには、明らかにベルテ事件の影響が認められる。

ただ、あらためてファゲの評論に戻ったとき、作者スタンダールが小説をラファルグ事件に近づけるために意図的に小説の結末をねじまげた、という説には賛同しかねる⁴⁵。また、レナール夫人の手紙を見た直後のジュリヤンの衝動的な行動が不自然であり、ラ・モール氏の沙汰があるまで待てばよかったという指摘も、にわかには腑に落ちない。ほかならぬジュリヤン自身がラ・モール氏の立場を即座に理解し、「ラ・モール氏を責めることはできない。 […] どの父親が、愛しい娘をこんな男にくれてやるものか」と言い放っているからである⁴⁶。だが、そもそもこうした議論が出てくるのも、ジュール・ジャンンの指摘にもあったように、手紙を読んでから狙撃に至るまでのジュリヤンの行動があまりに性急であり、記述が省略的だからである。実際、この第2巻第35章⁴⁷では、ここまで内的独白（モノローグ）や内的焦点化を通じて思考や感情の細かいひだの端々までを読者に見せてきたジュリヤンが、

⁴³ *Ibid.*, p. 652. 『法廷新聞』 (*La Gazette des Tribunaux*) からの転載記事。

⁴⁴ *RN*, p. 789 (II, 43).

⁴⁵ ちなみにベルテ事件もラファルグ事件も出版当時、それほど世間に知られていたわけではない。『赤と黒』とこれらの事件との関連に触れている書評は、知られているうちでは前出の『ルヴュ・アンシクロペディック』誌の記事 (1831) のみである (注18を参照)。ここでは作品の紹介に先立ってベルテ事件の梗概が述べられ、ブルジョワ的な19世紀の時代に、情熱的な若者が直面することになる事態や課題が予見されている。

⁴⁶ *RN*, p. 753 (II, 35).

⁴⁷ この章には「嵐」 (*Un orage*) という象徴的なタイトルがついている。

急に「暗黒のゾーン」(zone obscure)に入り⁴⁸、よそよそしい存在として感じられるようになるのである⁴⁹。少々長くなるが引用してみよう。

ジュリヤンは辻馬車を飛び降りると、通りのはずれに止まっていた郵便馬車のほうへ駆けていった。マティルドのことも忘れてしまったかのようにだった。 […]ジュリヤンはヴェリエールに向けて出発したのだった。早駆けの旅だったので、マティルドに手紙を書こうと思っていたが書けなかった。手で紙の上に文字を書いても、読める字をなさなかった。

ヴェリエールに着いたのは日曜の朝だった。土地の武器商の店に入ると、最近の出世についてお祝いを言われた。地元でも噂になっていたのである。ピストルを一丁ほしいのだということをつづいづい苦勞した。武器商は求めに応じて、銃を装填してくれた。

鐘が三つ鳴った。それはフランスの村々ではおなじみの合図で、朝方のさまざまな鐘のあとで、ミサがまもなく始まることを知らせる鐘なのだ。

ジュリヤンはヴェリエールの新しい教会に入った。教会の高窓はすべて緋色の幕で覆われていた。ジュリヤンはレナル夫人の椅子の数歩後ろに立った。熱心に祈っているように見えた。あれほど愛した女性の姿を見て、ジュリヤンの腕はぶるぶると震え、最初は計画を実行に移せなかった。「できない」と心の中でつぶやいた。「体が言うことをきかない。」

このとき、ミサをあげていた若い司祭が聖体奉挙の合図を鳴らした。レナル夫人が頭を垂れると、頭が一瞬ショールのひだにほぼすっぽりと隠れた。ジュリヤンにはそれが夫人だということがあまりよくわからなくなった。夫人をめがけて一発撃ったが、外れた。もう一発撃つと、夫人は倒れた⁵⁰。

この部分にはジェラル・ジュネットが「意図の省略」(l'ellipse des intentions)と呼ぶ「省略法」(l'ellipse)の一種が顕著に見られる。すなわち「登場人物の行動を、その意図を読者に知らせないまま伝え、あとで明らかにする」技法のことである⁵¹。ジュネットはこの技法が特に小説のこの箇所、意図的に用いられていることを強調している⁵²。というのもスタンダールがのちのヘミングウェイのように、ふだんから人物の感情よりも行動を客観的に描くこ

⁴⁸ ジャン・プレヴォーの表現。Jean Prévost, *La Création chez Stendhal*, Gallimard, coll. « Folio essais », p. 339.

⁴⁹ ファゲの時代に、ポール・ブルジェらによってスタンダールが心理主義の小説家として再評価されていたことが、こうした問題提起に大きく影響していると思われる。この時期のスタンダール受容について、日本語では次の文献が参考になる。岡田直次『スタンダールの復活 革命・社会・文学』、NHK ブックス、1988年。

⁵⁰ *RN*, p. 753-754 (II, 35).

⁵¹ Gérard Genette, *Figures II*, Seuil, coll. « Tel Quel », 1969, p. 183.

⁵² *Ibid.*, p. 184.

とに傾注する作家であったなら、この部分の記述の簡潔さは気にとめるほどではない。ただしこれ以外の部分では、小説の他の部分と同様、モノローグや焦点化を通じて、読者にはジュリヤンの心の動きが手にとるようにわかるようになっている。実際、引用部分の直後で「少しわれに返った」ジュリヤンは、「悲鳴をあげながら逃げていく女たちのあとをゆっくりと追った⁵³」。その過程で突き飛ばされ、憲兵たちに取り押さえられて収監されると、次頁ではもうふだんの独白調に戻っている。「ジュリヤンはわれに返り、ああ、これですべておしまいだ、と口に出して言った⁵⁴」。これ以降、われわれが目にするジュリヤンは、あくまでも自己に対して明晰であろうとする人物である。

この一時的な闇の部分は看過できるものではなく、ジュリヤンの「短時間の狂気」はベルテ事件という下敷きを知っている読者になら受け入れられようが、決して自然な展開とはいえない、というのが、すでに何度か言及したジャン・プレヴォーの立場である⁵⁵。プレヴォーは、スタンダールの小説には二度結末があることを指摘したうえで、「おれの物語は終わった⁵⁶」(« *mon roman est fini.* ») とつぶやき、いったん人生の幕を下ろしたジュリヤンが当然たどるべき次の展開—— 軍隊での栄光—— を避けようとした作者が、アントワーヌ・ベルテの症例をうまく利用して、一気呵成に犯罪の場面、そして収監後の場面へと物語を運んだのではないかと主張する⁵⁷。物語の展開に不自然さがある、という点ではファゲの主張に同調するプレヴォーだが、それはファゲの主張するように、作者が物語を事件に沿わせようとした結果ではなく、牢獄の中で真の幸福と自由を謳歌する主人公の姿を描くためだったとする。

それに対し、スタンダール研究の泰斗アンリ・マルティノーは、小説の展開自体に矛盾はなく、一貫しているという立場をとった⁵⁸。ジュリヤンの突然の愚行は、それがいかに唐突に見えようとも、小説をよく読んでみれば、それ以前にも彼が衝動的な行動に駆られる兆しがあったことがわかるはずである。たとえば第2巻第17章で、古剣でマティルドを刺し殺そうとする場面

⁵³ *RN*, p. 754 (II, 36).

⁵⁴ *Ibid.*, p. 755.

⁵⁵ Jean Prévost, *op.cit.*, p. 340.

⁵⁶ *RN*, p. 749 (II, 34).

⁵⁷ Jean Prévost, *op.cit.*, p. 340-342. ベルテは公判の中で、自身が犯行時に一種の心神耗弱状態にあったと主張した。

⁵⁸ Henri Martineau, *L'Œuvre de Stedhal*, Albin Michel, 1951.

や、マティルドに冷たくされて、自殺を考える場面などが挙げられる。ただしマルティノーは例の「暗黒のゾーン」をまた別のやり方で合理的に説明しようとして、心理学的、病理学的な論法に訴え、その後多くの批判を浴びることになった。レナール夫人の手紙を読んでから犯行に至るまでの間、ジュリヤンがずっと一種の「催眠状態⁵⁹」(l'état somnambulique)にあったというのである。だからこそジュリヤンは、馬車の中でマティルドに手紙を書こうとしてもうまく書けなかったのであり、武器商にピストル購入の意志を伝えるのにもあれだけ苦労したのである、云々。ただし考えてみれば、車中で手紙が書けなかったのは、ジュリヤンの頭が混乱していたためではなく、郵便馬車の速度が速かったからではないか、そして武器商相手に手間取ったのは、相手のおべっかやお世辞を封じるのに苦労したからではないのか⁶⁰…一研究者の作者と作品への愛が、過剰な思い入れとして出てしまった例といえるだろうか。

結語

今日に至るまで、解釈の大勢を占めているのは、テキストに書きこまれている細部を忠実に読む立場、すなわちジュリヤンの犯行が、誇りを傷つけられたことに対する復讐、および過去の恋愛の思い出を汚されたことに対する怒りによるものである、とする立場である。たとえば日本の代表的なスタンダリヤンのひとり大岡昇平は、この点に関して揺るぎない。「ジュリヤンは彼の成上りの理論からレナール夫人を馬鹿な田舎女と軽蔑していた。しかし同時にひそかに夫人を自分の魂の棲家ときめていたので、その裏切りに遇って我を忘れた」。犯行時のジュリヤンは、あくまでも正気なのだ。「この夢遊病者の足取りには後悔もなければ絶望もない。ただ常態でないその場の有様に驚いた子供のような心の状態があるだけだ。女を射ってから後のことを彼は正確にいえば一切想像していなかったのだ。といって彼は茫然自失しているわけでもない。彼は既に気をとりにおしている⁶¹」。イヴ・アンセルの主張するように、後世の注釈者や批評家の立てる仮説をことごとく見越した形

⁵⁹ *Ibid.*, p.409.

⁶⁰ たとえばイヴ・アンセルによる以下の反論を参照。Yves Ansel, *op. cit.*, p.134-135.

⁶¹ 大岡昇平「『赤と黒』」(初出1936年)、『わがスタンダール』所収、講談社文芸文庫、1989年、p.24-25頁。

で、すべては作家のテキストの中にあらかじめ書きこまれているのかもしれない⁶²。

スタンダールが1832年にイタリアの雑誌にむけて書いた自作解説の中で、レナル夫人の手紙に「怒り狂った」(furieux) ジュリヤンが犯行に及ぶ、と書いていることも、こうした解釈を補強するものと見なされている⁶³。ただし、この解説はあくまで二次的なテキスト(パラテキスト)であるし、スタンダールは自作の梗概を述べるにあたり、なんとジュール・ジャンがその一年前に『ルヴュ・アンシクロペディック』誌に載せた書評の一部をほぼそのまま転用しているのだ⁶⁴。その意味で傍証としては少し弱いが、スタンダール本人がこの一節を採用している以上、ジャンの解釈が『赤と黒』の作者の意図(「意図」と呼べるものがあるとすればだが)に背くものでなかったのはたしかである。

私としては、先のフリレール師とマティルドの対面の場面に挿入された、「あらゆる用心を軽んじるという幸福⁶⁵」という表現が、すべてを物語っているように思う。この部分のあとには、次のような一節が続く。

マティルドが育ったパリの上流社会では、情熱が用心深さの殻を脱ぐことはほぼない。窓から身を投げる人は、建物の6階住まいということになっている⁶⁶。

最後の一文には、自殺や犯罪にエネルギーの発露を見る、スタンダールのエネルギー礼賛の哲学が凝縮されている。「あらゆる用心を軽んじるという幸福」を知っている者は、こうした社会階層的な文脈の刻印を受けた者であると同時に、恋愛の奥義を極める者ともなる。社会小説、政治小説、同時代小説としての『赤と黒』と、恋愛小説としての『赤と黒』が、ここで出会う。心から愛した女性に対するジュリヤンの狙撃は、こうした複数の文脈の結節点において生み出された行為であると同時に、粗忽者こそが幸福に至るという、逆説的な、だが案外単純な真理を、われわれに示している。

⁶² Yves Ansel, *op. cit.*, p.127.

⁶³ Stendhal, « Projet d'article sur *Le Rouge et le Noir* », *RN*, p. 837.

⁶⁴ 前注20を参照。

⁶⁵ 前注31を参照。

⁶⁶ *RN*, p. 769 (II, 38).